伊藤道郎の東京オリンピック式典の演出構想

串　田　紀代美

１．はじめに

20世紀初頭に欧米で活躍した舞踊家の伊藤道郎（1893-1961）は、戦前のロンドン、ニューヨーク、ロサンゼルスでの舞踊創作ならびに上演活動が評価され、国内外で研究対象とされてきた。しかし、米国から日本に帰国した1943年以降は戦前の伊藤道郎の舞踊創作活動と比較し、その評価は低く研究の俎上に載ることはなかった。

その要因の一つとして考えられるのが、伊藤道郎のジャンル横断的な広範囲に及ぶ活動実践である。戦前期の活動の中心を占める舞踊創作、作品上演、後進の指導に加え、戦後はアーニー・パイル劇場総監督と芸術顧問の兼務をはじめ、伊藤道郎舞踊研究所の舞踊研究の指導、演劇作品における劇中の舞踊振付、繊維・服飾業界と協働企画したファッションショーでの舞踊の振付・演出、ファッションモデル・テレビタレント養成所の設立と運営、ミスコンテストの発案と審査、テレビ番組の企画と脚本執筆等に関わり、晩年には日本テレビ顧問の肩書を持つなどテレビジョン放送草創期に深く関与していた。このほか執筆活動や講演をこなし、メディアからの取材を頻繁に受けるなど、舞踊創作や舞台演出にとどまらない多彩な活躍であった。最晩年には、1964年開催の東京オリンピック開閉会式の総合演出を依頼された。しかしその実現を待たず、1961年に急逝した。

本稿は、戦後日本における伊藤道郎のジャンル横断的な活動実践のうち、最晩年の東京オリンピックの式典に関する構想の原点を一次資料から探ることが目的である。伊藤道郎の生涯にわたる舞踊創作、舞台演出の総括としての東京オリンピックという国家的祝祭における一大スペクタクルの輪郭を浮かび上がらせる。

２．伊藤道郎と東京オリンピックにおける式典の演出

本稿を論ずる前提として、第18回オリンピック競技大会が東京で開催されるに至った経緯を確認しておく。1964年に東京で開催された第18回オリンピック競技大会は、「平和と復興」をスローガンに掲げ、10月10日から24日まで東京都で開催された【図版１】。これは、第二次世界大戦で焦土と化した東京の復興を世界に示す好機であった[1]。1952年４月28日にサンフランシスコ講和条約が発効し、日本では連合軍による占領が解除された。その直後の1952年５月９日には、当時の東京都知事安井誠一郎が、第17回オリンピック競技大会招致を表明し、1954年にはオリン

ピック招致事務局を設置した（東京都公文書館2008：１）。1960年夏季大会開催地は東京ではなくローマに決定したが、これらの経緯を見ると東京都の夏季オリンピックの誘致は、事実上1952年から開始されたことは明白である[2]。

東京は次期オリンピック競技大会の招致を視野に入れつつ、第３回アジア競技大会東京大会（1958年５月24日から６月１日に開催）を実施し、東京都が国際的な水準の総合競技大会を東京都で開催することが可能であることを訴えた。そのため、オリンピックさながらの聖火リレーの導入【図版２、図版３、図版４】や式典の演出【図版５、図版６、図版７、図版８】がなされ「いわばオリンピックの予行演習といってもよい内容」であった（東京都公文書館2008：２）。東京都公文書館が所蔵する東京都の公文書の中に、第18回オリンピック競技大会関係文書が残されている。280冊から成るこのオリンピック関係文書は、1952年から1966年までの文書が収録されている。第３回アジア競技大会組織委員会の文書162冊の薄冊が含まれていることに加え、「第３回アジア競技大会開催要項」で明記されているとおり、1958年に開催された当該大会と第18回オリンピック競技大会の開催地誘致とが一体になっていたことは明らかである[3]。第３回アジア競技大会が大会運営を含めた組織委員会の尽力が評価されたことにより、第18回夏季オリンピックの開催候補地として本格的に招致活動に乗り出すことになる。

以下では、1964年第18回オリンピック競技大会の開閉会式の総合演出を担当する予定であった伊藤道郎と第３回アジア競技大会式典演出との関係を中心に、1960年１月から急逝する1961年11月までの新聞雑誌記事ならびに手記、手稿、メモ等の一次資料から、幻となった東京オリンピック式典の演出構想とその着想について分析する。

2.1. 資料から探る東京オリンピックにおける式典演出の構想

第18回オリンピック競技大会の東京招致の布石としての意味があった第３回アジア競技大会の成功は、その後の招致活動の追い風となった。招致活動が成功し東京でのオリンピック開催が1959年に決定すると、オリンピック東京大会組織委員会が設置された。伊藤道郎がいつの時点で式典関連の総合演出の担当を任されたかは、現段階では特定できていない。しかし、早稲田大学演劇博物館所蔵「千田是也コレクション」に収められている「伊藤道郎関連資料」[4]の「オリンピック関係資料」（SND-J24）には、1960年１月の日付で「序曲『絹の道の彼方へ』」（SND-J24_0001_001_01）と題された印刷台本（全46頁）があり、伊藤道郎が式典関連の総合演出の担当に決まったのはこの前後であると推測できる[5]。ここからは、伊藤道郎による東京オリンピックにおける式典の演出構想を手稿とメモからその輪郭を浮かび上がらせる。

「伊藤道郎関連資料」の「オリンピック関係資料」（J24）は、東京オリンピックに関連する資料を集めたもので、合計10種類の資料で構成されている資料群である。資料１（SND-J24_001_001_01～26）は「序曲『絹の道の彼方へ』」1960年１月の印刷台本、資料２（SND-J24_002_001_01～06）は、『週刊朝日』第66巻第５号で1961年１月27日に掲載された「聖火リレー絹の道を行く」（SND-J24_0002_001_01）と「生きかえる絹の道（シルクロード）」（SND-J24_0002_001_02）等の記事、資料３（SND-J24_003_001_01～002_27）はローマオリンピック取材ノート２冊で、1960年開催の第17回ローマオリンピック競技大会にオブザーバーとして参加した際の開会式の様子が詳細に記載されている。具体的には、現地で購入したと思われる２冊のノートの表紙

（SND-J24_0003_01_01, SND-J24_0003_02_01）に絵葉書、その見返し（SND-J24_0003_01_02）にはローマが位置するウンブリア州と隣接するマルケ州に関するイタリア語の地理情報が貼られ、裏表紙（SND-J24_0003_01_20）にもマルケ・ウンブリア両州のイラストが貼られている。１冊目のノートには、イタリア語の簡単な挨拶や英文手紙の自筆メモに加え、開会式会場と聖火台のスケッチ、ファンファーレの楽譜、音楽隊や合唱団の位置、入場パレードの隊列のフォーメーション等を記したイラスト、「騎手に皮のサッポーターをつける事」などの詳細を記したメモが書かれている。２冊目のノートも、１冊目と同様に表紙には絵葉書、その見返しにシチリア州の基本情報が貼られ、ノートの記載内容は「十八日　オリンピック競技の開会式の準備は絶対に他人の入場を禁じ…」「開会式に参加する各国選手は全員の半数にへらされた層だ」「閉会式には選手は全く登場せず、参加国の国旗とプラカードのみとの事」「蜂谷氏が Tickets の心配をして呉れる事になった」など式典に関する覚書のメモ（SND-J24_0003_02_04）、「聖火運送の私考」（SND-J24_0003_02_06）、「聖火リレーの計画と実施」（SND-J24_0003_02_07）、「第十七回オリンピアー大会／オリンピック・スタジアム◇一九六〇年八月二十五日（木曜日）／開会式要項」（SND-J24_0003_02_17～SND-J24_0003_02_23）などが記されている。

資料４（SND-J24_0004_01_01）は、「第17回国際オリンピックローマ大会に関する雑記 OLYMPIC MEMO」と題された大学ノート１冊で、1960年８月25日から９月11日の18日間のメモを中心に、古代オリンピックの歴史と聖火点火式、聖火リレーに関する文章、「地球の平和の祭典としての東京オリンピック大会一九六四年／序」（SND-J24_0004_01_09）と題された縦書きの文章が４頁にわたり記述されている。資料５（SND-J24_0005_01_01）は、「オリンピックローマ大会考査報告書目次案」、「ローマ調査団報告懇談会報告事項／1960年11月11日」（SND-J24_0005_01_02）と書かれた印刷の綴りである。資料６は、「東京オリンピック開催について」（SND-J24_0006_01_01～SND-J24_0006_01_020））と題された手稿全19枚、資料７は「東京オリンピックの諸問題、東京オリンピック尚早論」（SND-J24_0007_01_01～SND-J24_0007_01_32）と表記された手稿全31枚である。資料６と資料７は、ともに伊藤道郎の筆跡ではない他者の文字で書かれている。資料８は「オリンピックローマ大会を顧みて」（SND-J24_0008_01_01～）調査報告書原稿11点で11種類の不完全手書き原稿が含まれている。資料９は「ローマオリンピック取材メモ」（SND-J24_0009_01_01）の手稿11枚で、反古紙にメモ書きであることから資料３のメモとの推測が可能である。資料10（SND-J24_0010_01_01～）は、東京オリンピック大会に関しての新聞記事スクラップブックであり、伊藤道郎に関連のある新聞雑誌記事が個々に集められている。手稿や手書きメモは複数のインクの色で書かれており、書き損じも含まれていることから下書きと清書が混在している可能性がある。

ここからは、伊藤道郎による東京オリンピックの式典における演出に関連があると思われる資料を中心に取り上げ、その内容を概観する。

資料１　「序曲『絹の道の彼方へ』」1960年１月

当該資料は、「絹の道は密かに呼ぶ／絹の道は砂漠の虹と浮かぶ／絹の道は砂漠のミラージの如く」という文章から始まる。その内容を要約すると、世界の道はローマの都に通じるが、その道はかつて戦車や捕虜、奴隷の列が通った戦争の道であった。しかし、この道は東方からの「陳

奇な文化財」をも運んだ。まるで母なる地球の中央にある「円い胸にかかる絹のようにつらなる平和な道」でもあり、戦争の面影は消え去り「世界平和の大道」であったとしている。以後、45ページにわたって、絹の道では文化接触によって芸術性の高い文化が生まれ、正倉院御物にみられるペルシャや西域の影響関係について言及し、さらにはローマにおける文化財としての絹と女性の関係性に触れたあと、長安、甘粛、敦煌、天山北路と天山南路、タリム盆地、東トルキスタン、ウルムチ、パミール、安息国、アレキサンドリア、エクバタナ、ヒエラポリス、シリア王国などの絹の道の主要地と歴史を説明している。その後、絹の道は宗教の道でもある点に触れ、各地域の宗教者についての短い解説を記している。

伊藤道郎は資料１の文章で、冒頭に絹の道は戦争の道であったが、今や戦争の面影は消え、東西の芸術文化を運んだ平和に続く道であると記述しているおり、「東京オリンピック」が戦争からの復興と平和が当該競技大会の目的であり、その象徴としてシルクロード聖火リレー案を考案したことを改めて確認することができる[6]。さらに資料１は、以下の言葉で締めくくられている。

> 中央アジアはかつてボローディンの音楽にみる旷原の調べを伝えたがいまはトラクターが走り、蘭新鉄道という中央アジア横断鉄道の工事が六年前から中・ソの協力で進められている。イヴアーノフの音楽「コーカサスの風景」に聞くようなイスラムの歌やリムスキー・コルサコフの交響組曲「シエラザード」にひびくアラビアのメロディーは今もなおイスラム寺院のアラベスクをそのままに伝えている。
>
> モスクワからタシケントまでジェット機で往復している坦々とした自動車道路は一挙に沙漠を横断してポプラの葉陰に明るい電燈が文明の光りを輝かしている。再びトンコウの高度な信仰と芸術はいままた新しい文明の生命として復源（ママ）しようとする。
>
> 絹の道は未来にわたり、永遠の生命をもって強く光沢ある絹糸さながらに東西の文明を固く美しくかわらざる愛のうちに結び合わせ織りなすのである。

資料３　ローマオリンピック取材ノート２冊

1960年８月15日から１か月間イタリアの首都ローマに滞在し、第17回夏季オリンピック競技大会の開会式の様子を記述したノートである。ノートの冒頭には、８月18日のメモが数行記されており、８月14日付で『読売新聞』が伝えた「点火式に出席して」と題した記事についての記述の次に、1960年８月12日午前９時から始まったギリシャのオリンポス山頂における聖火点火式の式典や、聖火リレーの様子が細かく記されている。それによると、聖火点火式は、古代ギリシャの衣装を身にまとった少女隊と共に、先頭を歩いていたギリシャ国立劇場女優アレカ・カゼリー（カッツェリ；Aleka Katselli）による祈りの言葉が奏上されると、そこから約20メートル離れたところで、聖火の採火が始まったという。さらに競技場のスタートラインには、直径約35㎝の大レンズが置かれ、点火式式典の演出者がレンズを太陽に向けてかざすと、トーチの先から煙が出て「やがてバラ色の炎」がついた。こうした一連の式典は、厳かな儀式というよりも、伊藤道郎にとっては「一種の野外劇だった」と記述している[7]。

伊藤道郎の観察はさらに続く。聖火は無事に火皿に移され、女優カゼリーはこの火をトーチに受け、ヘラの神殿に歩み寄った。次に、ギリシャ体育大学の学生で十種競技選手のエピトロプロスが火皿からトーチに火をつけ、トーチを持った右手を高く掲げると体を素早く半回転し、体を乗り出して走り出した。この光景を眺めながら、伊藤道郎は1964年の東京オリンピックについて考えていた。

> 私は感動に包まれたまま、四年後の東京大会を思いうかべた。その時もきっと聖火はこのようにしてオリンピアから東京への道を運ばれてくるだろう。
>
> たが、その道はいろいろある。飛行機で東南アジアの各国を結ぶ道、陸路いくつかの大陸を走り抜ける道。しかし私がもっとも望ましく思う道はその頃までには中国のオリンピック参加がきまり、中国本土の北京や朝鮮半島を通り日本本土に達する道だ。それが古代ギリシヤの先人が今に残したオリンピック精神に通じるものではないだろうか。

1960年１月には、聖火ランナーが絹の道を走るという着想は、伊藤道郎の中で明確にあった。この聖火点火式典の詳細は、８月25日刊行の政治と文化を扱った週刊誌『OGGI』に掲載された。

さらに同年８月25日の開会式の様子とともに、参加者の一挙手一投足が細かく記録されている。式典会場になった円形フィールドの見取り図とともに式典参加者の位置を記したイラスト、式典に使用された音楽の楽譜のみならず、数種類にわたるファンファーレの楽譜が含まれている。以下、観察は続く。

> 北側スタンドに音楽隊４組／ギリシャの国旗を始めに44本、ボードを中央に22本ず（つ）／東側スタンドの中央にオリンピック旗、其の左にイタリアの国旗が６本／右側にローマ市の旗６本、オリンピック旗の下に聖火台がある。／南側にもボートをはさんで44本、西側に貴賓席、報道席がある。４p.m. と云うので西側スタンドは日影にあるが、北西南は南欧の暑い夏の太陽がカンカンと輝って、焼付く様だ。／4.30 p.m. にはスタンドは九分通り満員となった。／時間表によると元首の入場とあるがまだその様な様子がない。

２冊目のノートの最後には、「オリンピックは８月25日に始まった。開会式は、それほどエキサイティングではなかった。こんなに遠くまで見に来たのに、ちょっとがっかりだ」と記されていた[8]。９月16日に東京に戻ると書かれているほか、開会式以降の詳細についての記載はない。ノートに残された文章からは、聖火リレーについて特に強い関心を持っていたことが確認できた。

資料５　オリンピック ローマ大会調査報告書目次案

当該資料は、８月25日から９月11日までローマで開催された第17回夏季オリンピック競技大会の調査報告書の目次と分担者の記録である。「序文」を執筆した竹田恒徳は旧皇族で、東京オリンピック招致に尽力し、1962年には日本オリンピック委員会委員長に就任している。

第３回アジア競技大会の式典に関する資料は、先述の「千田是也コレクション」所収「伊藤道郎関連資料」資料５の非公開資料「オリンピックローマ大会考査報告書目次案」（SND-J24_0005_001_01）に含まれている。具体的には、当該資料の「オリンピックローマ大会調査報告書」目次案の「式典」の項目に「ハ．開閉会式その他の演出（松沢・伊藤）」と記されている。この「（松沢、伊藤）」と記載された「伊藤」とは伊藤道郎であり、「松沢」とは松沢一鶴を指している[9]。松沢一鶴は、日本の競泳選手として戦前より国内外で活躍していた。一方で式典の演出に手腕を発揮しており、先述した1958年に東京で開催の第３回アジア大会では、式典を担当していた[10]【図版11】。第17回オリンピック競技大会の調査報告書に伊藤道郎と松沢一鶴の氏名が記載されているということは、この２名が1964年に東京で開催される第18回オリンピック競技大会の開閉会式の演出を任されていたことを示す。

1960年12月11日の『朝日新聞』朝刊９頁には、オリンピック東京大会組織委員会の事務次長に松沢一鶴が就任したことを伝える記事「事務次長に松沢氏　組織委　東京五輪」が掲載されている。しかし、伊藤道郎の式典に関する新聞記事等は、この時期の前後に確認することができない。伊藤道郎は、1964年の東京オリンピック開催を待たず、1961年11月６日に急逝している。伊藤道郎亡き後、松沢一鶴は1964年の東京オリンピック閉会式において、国家、人種、性別を超え、選手が一同に入場するという従来の常識を打ち破るような演出を実現した。これは後に「東京式」といわれ、高く評価された。1964年を待たずに急逝した伊藤道郎の演出は、東京オリンピックの式典に何も影響を与えなかったのであろうか。「式典の神様」との異名を持つ松沢一鶴と伊藤道郎は、そもそもどのようなきっかけで東京オリンピックの式典を担当することになったのであろうか。

伊藤道郎と松沢一鶴を結び付けたのは、国際オリンピック委員会（以下、IOC と記す）総会開会式典だと考えられる。第３回アジア競技大会は、1958年５月24日から６月１日までの９日間、当時の天皇皇后両陛下、皇太子殿下をはじめとする皇族に加え、A. ブランデージ IOC 会長以下、IOC 委員、岸信介首相を迎え行われた。実はこれに先駆け、1958年５月14日、NHK ホールにおいて第54回 IOC 総会が開催された。第３回アジア競技大会が、東京オリンピック招致への道を開く役目を担っていたからである。1959年刊行『第３回アジア競技大会報告書』には、当該大会の詳細な報告のほかに、「IOC 総会の開会式」、「IOC 総会の接伴について」、「IOC 総会の準備と経緯」などが詳細に記載されている。それによると IOC 総会開会式の委員会は1957年４月22日に設置された IOC 準備委員会において、小委員会設置が協議され、IOC 総会式典委員会の式典委員長に武田恒徳（IOC 常任委員）、委員に松沢一鶴（IOC 常任委員）が就任した。さらに委員には諸井三郎（作曲家、文部省社会教育官）、伊藤道郎（舞踊ならびに演出家）、伊藤熹朔（舞台美術家）、岸田日出刀（建築家、東京大学教授）の名前がある[11]。

IOC 開会式ならびに第３回アジア競技大会の式典の詳細については紙幅の都合があるため本稿では触れないが、伊藤道郎と松沢一鶴は、東京オリンピックの前哨戦といわれた第３回アジア競技大会に時期に先立ち開催された IOC 総会開会式の式典委員会委員として、1958年から国家的祝祭の場面を彩る式典の演出を伊藤熹朔とともに手掛けてきたことが明らかになった。以上のことから、1964年の東京オリンピック開閉会式においても、伊藤兄弟の演出手法が何等かの影響を与えたという前提で、以下の論述を進めていく。

2.2. シルクロード聖火リレー案

資料８「オリンピック ローマ大会を観て　調査報告書原稿11点」には、以下のように記述されている。「伊藤道郎がオリンピック見学／東京大会の演出の参考に」との見出しに続き、東京オリンピックの開会式、閉会式の構成、演出を担当することになり、８月にローマで開催されるオリンピック見学の理由が明記されている。それによると、当時東京オリンピック組織委員会副委員長であった竹田恒徳より８月15日から１か月間のローマ派遣を依頼されたこと、1964年開催の東京オリンピックの式典では「日本的なものをやろう」という案は出されたものの、具体的な計画がない状態であったことが確認できる。しかしながら、ここまで見てきたように伊藤道郎の手稿ならびにメモの記述量と調査内容から、聖火リレーに対して注目しており、それは以下の新聞記事からも明白である。

その記事とは、1961年１月９日付『山陽新聞』に掲載された「聖火をシルクロードで　ギリシャ―東京間をリレー」のことである。当時、オリンピック東京大会組織委員会顧問で演出家の伊藤道郎が、オリンピック東京大会組織委員会会長の津島寿一に対し、聖火はギリシャからシルクロードを経由し東京に運ぶことを提案している。具体的には、中央アジアから大陸を横断し、中国、南北朝鮮を経て日本までの約１万㎞を、アジア各国の青年等が１年がかりで走るという構想であった。伊藤道郎が考えるシルクロードの聖火リレーについて、当該新聞記事は以下のように伝えている。

> 四年後のオリンピックは国際情勢の進み方からいっても、いままでのように開催期間中だけの“休戦”や“平和”の象徴としてでなく世界が“永久の平和”を誓い合い、祝い合う大会になるべきだ。その意味で、東西の交流と握手の象徴であり、侵略者の道でなく文化使節の道であった“シルク・ロード”を聖火のコースに選んではどうか。アジアで初めてのオリンピックを東京で開く意義もぐんと大きくなる

> なるべく多くのアジアの国を通るために「“シルク・ロード”を広義に解釈して」ギリシャからシリア、イラク、イランを通りアフガニスタンのカブールあたりからインドを横断、タイ、ビルマからベトナムを経て北上、中国にはいり、北京を通って朝鮮半島を南下することを考えている。この間およそ一万㌔、聖火は大会の約１年前にオリンピアを出発、各国の青年たちによって走り継いでもらう。砂漠や原始林、大山岳地帯も通るからラクダや馬も使って、それぞれの地方色をふんだんに出す。昼は寺院などに預け、夜だけ走って聖火の美しさを生かす。日本では日向の高千穂の峰から伊勢神宮を通しては…と、伊藤氏の構想はいかにも演出家らしい。

当該記事は、予算等の点からこの夢物語に反対意見も出される可能性を示唆しているが、遺伝学者で京都大学教授の木原均、小説家の井上靖が実現に賛同しているとしている。1964年に開催する東京オリンピックの準備が本格的に動き出す時期でもあり、大会組織委員会は検討に着手するとみられることが伝えられている。

同記事は、いずれも同日付で「聖火、シルクロードで／伊藤氏東京五輪で提案」『日本経済新

聞』、「聖火をシルク・ロードで　東京五輪組織委に提案／１年かかって走る／馬の背も借りる一万㌔」『西日本新聞』、「東京五輪の聖火　リレーコースに“シルク・ロード”を／美しさ生かし夜走る／陸路一万㌔を一年余りで／伊藤氏提案」『四国新聞』、「“東京五輪”に雄大な計画／聖火を“絹の道”で／大陸横断一万㌔　ラクダも運搬に一役」『熊本日日新聞』として掲載された。

シルクロードを経由する聖火リレー案は、実は伊藤道郎の提案が初めてではない。当該記事でも指摘されているように、1940年に開催される予定であった東京オリンピックで、すでに計画されたことがある[12]。しかし当時の計画は、アジア大会参加国を中心とする21か国を空路で回るという案であり、伊藤案とは異なっている。こうした着想の根底には、伊藤道郎の舞踊創作活動においてしばしば垣間見える「プリミティブ幻想」、すなわち素朴で粗野で原始的な表現や演出傾向が窺える。紙幅の制限があり本稿では詳しく言及しないが、この問題はあらためて検討する必要があると思われる。

ところで、伊藤道郎の聖火リレーの提案では、シルクロードのみならず日本国内の経由地として「日向の高千穂の峰」と「伊勢神宮」の名前が挙げられている。突然とも思える日向の高千穂とは、伊藤道郎にとってどのような場所なのであろうか。

３．日向神話と郷土舞踊「熊襲踊」

宮崎県には、高千穂神楽に代表されるような「日向神話」に関連する名所旧跡や口承文芸が数多く残されている。日向における天孫降臨伝説に基づき、日向の高千穂を中心に伝承される神話が「日向神話」である。この神話をもとに、南九州で勢力を持っていた熊襲の首長、八十梟帥を退治したのが日本武尊であった。この神話を題材にしたのが、「熊襲踊」である。

先述の複数の新聞記事が伝えたように、1964年開催の東京オリンピックの聖火リレーの起点に、宮崎市内の平和台が決定した。その後、実際に聖火リレーのコースの詳細を検討することになり、提案者の伊藤道郎を黒木博宮崎県知事が招待した。訪問当時、伊藤道郎の聖火リレー案は、シルクロードから朝鮮半島に南下し、釜山から空路で宮崎県内の山領に聖火を下ろすという計画であった。このとき、伊藤道郎は聖火を運ぶための具体的なルートの検討とともに、もう一つの目的を持って宮崎県を訪れている。それが、宮崎県内の郷土舞踊を訪ねるという計画であった。案内役の阿万為人は、県南から県北方面に進み、「泰平踊」、「神代舞」、「ジャンカン馬踊り」、「高千穂神楽」などを一通り紹介した。なかでも伊藤道郎が関心を持ったのは、「熊襲踊」[13]であったという（阿万1973：35）。原初的な風景が合うという「熊襲踊」の概要について、以下に安万為人の説明を引用する。

> 粗末なモメン織りのカタビラ、シュロの皮でつくったカツラ、グロテスクな面をつけ、足にもシュロでこさえた脚絆をつけ、大きなバラ太鼓を胸の辺に高々とゆわえつけて、片足を高々とあげ、バラ太鼓を打ち、円舞する。踊の中ごろでウーウーとうめくような所作で、折り重なって倒れる場面があるが、胸に結えつけたバラ太鼓が邪魔になって、なかなか起き上がれない。

演者が次々と倒れ、大きなバラ太鼓が障害物となり起き上がれない場面は滑稽で、見物客の笑い誘うという郷土舞踊である。バラとは農具の一種で、割り竹を円形に編んだもので、豆類や穀類を乾燥する際に使用する。これを２つ合わせて腹部に結わえ、中央の部分を太鼓のように撥で叩きながら踊る郷土舞踊である。「熊襲踊」を見た伊藤道郎は、「これは純朴だが、愚直な山村民俗を表現した踊だな」との感想を述べたという（阿万1973：36）。さらに高千穂町では、三十三番の演目を持つ神楽を神楽宿で鑑賞した。ここで披露された岩戸神楽にも伊藤道郎は心を動かされたと見え、「ちがった面で、踊をアレンジしてみたい」と話していた（阿万1973：37）。

実は、伊藤道郎と日向に伝わる「熊襲踊」ならびに高千穂町の「岩戸神楽」との出会いは、これが初めてではなかった。義妹で日系米国人舞踊家のテイコ・イトウが1940年５月２日に軍人会館で開催した「第４回東洋舞踊公演 Teiko Ito Oriental Dance Recital」のプログラムには、第１部の２番目と３番目の演目に「岩戸神楽」と「熊襲踊」が記載されている（串田2023：31-32）。当該公演に伊藤道郎は出演していないが、伊藤道郎の実弟である伊藤祐司と妻のテイコ・イトウは1934年に来日し、1941年まで東京を拠点に舞踊活動を行っていた。さらに1939年11月26日、27日、12月３日、４日に開催された舞踊公演「イトウレサイタル」には、伊藤道郎とともにテイコ・イトウが出演しているため、伊藤道郎は宮崎県の２つの当該演目についても何等かの情報を得ていた可能性がある。

以上のことから、1964年開催の東京オリンピックにおける聖火リレー式典ならびに開閉会式等の演出の構想は、シルクロードを経由する案が1940年にすでに提案されていたことが示唆するように、米国滞在中の舞踊創作活動の経験を含めた伊藤道郎自身の過去の舞踊レパートリーと舞台演出等の経験をもとに着想を得たと考えられる。

４．おわりに

本稿では、伊藤道郎が最晩年に関わった第18回オリンピック競技大会の式典の演出構想と着想について、1960年１月から1961年11月までの新聞雑誌記事、手記、手稿、メモ等の一次資料から描き出すことを試みた。その結果、各種式典の演出構想は東京オリンピックの総合演出担当への就任後に新たに着想を得たというよりは、むしろそれまでの舞踊創作活動を通して積み上げられた舞踊レパートリーや、舞台演出の経験を通して得られた知見をもとに演出を構想したことが示唆された。

紙幅の都合により本稿では詳しく触れることができなかったが、1952年４月28日のサンフランシスコ講和条約の発効後の対日文化外交を視野に入れつつ、1950年代後半から1960年代にかけて国家的祝祭空間としての東京オリンピックの政治性とそれに伴う開閉会式の文化芸術的な演出効果を考察する必要があろう。伊藤道郎は、27年間米国で過ごし、占領期に連合軍によって接収されたアーニー・パイル劇場では連合軍側と日本側を繋ぐ役目を担っていた人物であった。

1950年代に、日々の生活文化のなかで伝承されてきた郷土舞踊や郷土芸術は、戦後の文化財保護行政の対象となり、民俗芸能という新たな名称を得たうえで、その一部が無形民俗文化財になっていく。その一方で、対外的には外務省派遣の文化外交使節としての役目を担った海外公演専門の民族舞踊団が結成されていった。民俗芸能の舞台化や国立民族舞踊団設立を求める声が聞

こえるようになるのも1960年前後であった。国内外のこうした文化芸術をめぐる社会的変化と文化的価値観の形成を含めたうえで、伊藤道郎と東京オリンピックの式典演出に関する問題を議論する必要がある。これは今後の課題としたい。

主要参考資料

阿万為人「日向路の踊と伊藤道郎」『芸林』８月号、1973年８月、34-37頁。
伊藤道郎「ローマ・オリンピックを見て東京大会に望むもの」『教育じほう』166、1961年10月、16-17頁。
太田亮吾「東京都公文書館所蔵『オリンピック関係文書』における簿冊情報抽出の試み」『東京都公文書館調査研究年報』第５号、2019年、25-36頁。
オリンピック東京大会編集委員会『第十八回オリンピック競技大会公式報告書』上、オリンピック大会編集委員会、1966年。
串田紀代美「伊藤祐司がブロードウェイにもたらした『東洋』―1930年代後半の日本・アジアにおける民族芸能の調査―」『紀要』第65集、実践女子大学文学部、2023年３月、25-50頁。
田畑政治編『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年。
東京都公文書館『東京都公文書館だより』第13号、2008年９月、１-３頁。
冨田幸祐「『援助・非介入』の中での再出発―第１回アジア競技大会（1951年）日本選手団参加に対する国庫補助金交付―」『日本体育大学スポーツ科学研究』８、2019年、１-９頁。
前田博仁「伝統的な踊りを変えた熊襲踊」『みやざき風土記』No.174、https://www.miten.jp/miten//modules/popnupblog/index.php?param=10-201712（最終閲覧日：2023年10月17日）。
柳下恵美「伊藤道郎のアメリカにおける舞踊勝郎―ロサンゼルスでの活動を中心に―」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌＝WASEDA RILAS JOURNAL』４、213-224頁。
「競技特別委に春日氏ら　東京五輪組織委 来年ローマへ視察員」『読売新聞』1959年12月１日、朝刊、５頁。
「四年後に備え　ローマに行く　変わりダネ視察員／閉会式に“東京音頭”日本調とり入れたい 式典演出 伊藤道郎氏」『読売新聞』1960年８月４日、夕刊、４頁。
「期待裏切った開会式 欠けていた流動感 東京では“日本の美しさ”を」朝日新聞1960年８月27日、朝刊、10頁。
「東京オリンピック聖火リレー 大陸コース踏査隊を派遣」『朝日新聞』1961年６月12日、朝刊、1頁。
「聖火リレー踏査隊 東へ　めざす炎熱サバク ジープで二万数千キロ／四氏からメッセージ 待ち望まれるデータ」『朝日新聞』1961年６月24日、夕刊、３頁。

謝辞

本稿は、JSPS 科研費 JP21K12873の助成を受けたものです。

注

1　1960年にローマで開催された第17回オリンピック競技大会の視察にローマを訪れた伊藤道郎は、そ

の後『教育じほう』に寄稿しているが、その記事のなかでローマオリンピックが第二次世界大戦の敗戦国イタリアの「復興した姿を、全世界に示す絶好のチャンス」であることに言及している。『教育じほう』166、1961年10月、16頁。

2　第18回オリンピック競技大会の前哨戦と言われた1958年開催の第３回アジア競技大会の開催については、1951年以来東京都が強い希望を有していた。時系列に沿って説明すると、1951年10月、11月、浅野均一国際スポーツ委員会総務主事は安井誠一郎都知事（当時）らと３回の会談を経て、東京都での第３回アジア競技大会開催の強い意志があることを確認した。1952年６月23日開催の第３回アジア競技大会第７回理事会、第８回国際スポーツ委員会において、東京開催との意見が開陳された。同年７月24日にはヘルシンキ市で開催されたアジア競技連盟総会で当該大会の日本開催案が上程され、1958年に日本開催が正式決定した。『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、210頁。ここに至るまでに、1948年のロンドンオリンピックでは日本とドイツは招待されず不参加であったが、1949年の全米水泳選手権への選手派遣以降、1950年 IOC 総会では各国競技連盟に対し、日本の再加盟が要請され、1951年３月にインドのニューデリーで開催された第１回アジア競技大会への参加を果たした。冨田幸祐「『援助・非介入』の中での再出発―第１回アジア競技大会（1951年）日本選手団参加に対する国庫補助金交付―」『日本体育大学スポーツ科学研究』８、2019年、２頁。

3　「第３回アジア競技大会開催要項」には、目的として「アジア競技大会憲章にもとづく第３回アジア競技大会を通じ国際信義と友愛の確立をめざし、あわせて日本スポーツ界の発展に寄与するとともに、1964年に開催さるべき第18回オリンピック大会招致の有力なる要件とする」と記載されている。『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、213頁。

4　「千田是也コレクション」所収の「伊藤道郎関連資料」は、データベース化されて以下の URL からアクセスが可能である。＜https://archive.waseda.jp/archive/subDB-search.html?arg={%22item_per_page%22:20,%22sortby%22:[%22%22,%22ASC%22],%22view%22:%22display-simple%22,%22pagination%22:{%22page%22:1},%22subDB_id%22:%2292%22,%22id%22:%2234989;298%22,%22advanced_search%22:false}&lang=jp＞（最終閲覧日：2023年12月25日）。

5　オリンピック東京大会組織委員会は、1959年11月30日に第３回総会を開催し、1960年にローマで開催される第17回オリンピック競技会への視察のため、視察員を派遣することを決めている。新聞報道には松沢一鶴、伊藤道郎の記載はないが、1959年12月１日から1960年１月までの期間に東京で開催される第18回オリンピック競技会開閉会式などの式典演出が決まったものと推測できる。「競技特別委に春日氏ら　東京五輪組織委 来年ローマへ視察員」『読売新聞』1959年12月１日、朝刊、５頁。

6　伊藤道郎による聖火リレーのいわゆるシルクロードコースの構想は、その後1961年６月にオリンピック東京大会組織委員会会長の津島寿一の協力を得て、２万数千キロを横断するユーラシア大陸コースの踏査隊が派遣された。調査隊は、ギリシャ、トルコ、アラブ連合（シリア）、イラク、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、タイ、マレーシア、シンガポールの12か国と１自治州を実際に訪れ、聖火リレーの具体的なコースについて検討した。「東京オリンピック聖火リレー 大陸コース踏査隊を派遣」『朝日新聞』1961年６月12日、朝刊、１頁。

7　伊藤道郎は米国滞在中、複数回にわたり野外での舞踊を上演しており、「野外劇」に強い関心を持っていた柳下（2016：215, 217, 220）。1929年６月にカリフォルニア・アート・クラブの庭にある劇場で野外コンサートを開催したほか、８月５日、12日、19日、26日、９月２日にアーガスボウルで野外舞踊を、９月20日にはローズボウルで光のページェントと題して野外舞踊を上演した。さらに1930年８月25日に約2000人の観客を前にハリウッドボウルでの野外公演で「シエラザード」と「イーゴリ公」の振付を担当、1937年には再びハリウッドボウルで近衛秀麿指揮の管弦楽版「越天楽」とシュトラウ

ス作曲「美しく青きドナウ」の２作品を披露し、同年９月24日にはハリウッドボウルで開催された「カリフォルニアの夜の音楽祭」でモーツァルト作曲「２つのメヌエット」と、初演時に高評を得た「美しく青きドナウ」を上演した。特に1930年月15日のハリウッドボウルの野外公演では、米国オリンピックフェンシングチームの選手であったラルフ・B・ファルクナーが「イーゴリ公」で「グラディエーターの踊り」に出演しており、古代ギリシャの振付・演出が加味されていたことが確認できる（柳下2016：218）。以上のことから、オリンピアの古代競技上遺跡にあるヘラ神殿で古代衣装に身を包み巫女に扮した女優等によって執り行われた「野外劇」としての採火式が、過去に手掛けた一連の野外公演を連想させたと推測できる。「点火式に出席して－アテネの川本信正氏に聞く－」『読売新聞』1960年８月14日、朝刊、７頁。

8　伊藤道郎は、1960年８月25日の第17回オリンピック競技大会開会式をローマで視察し、「期待裏切った開会式」という記事を執筆した。それによるとこの開会式は演出の失敗であり、その理由として式典全体に秩序がなく、「ダラダラと式が続き、その流れがポツンポツンと切れ、ふんいきが最後まで盛り上がらない」点を挙げ、マイクの音声・音量の不備や退屈した観客が口笛を鳴らすといった態度が目立ったという。その一方で、日本選手の整然とした威厳ある態度を称賛している。とりわけ伊藤道郎が注目していた式典クライマックスでは、6000羽の鳩が飛びローマ市内の全教会の鐘が鳴るなかで聖火ランナーが登場するという予定であったが、聖火登場のタイミングが大幅に遅れ、「ちぐはぐのまま終わっ」たことに落胆する様子が確認できた。開会式はオリンピック憲章で規定されているため、そのなかで「いかに美と感動をもり上げるかが、演出の工夫どころになる」が、「音楽的な流動感のとぼしいセレモニー」は失敗だと明言している。伊藤道郎のこうした言葉から、自身の演出に対する態度が確認できる。伊藤道郎は、当該記事の最後に「ローマに入ればローマ人になれ」という諺を借りて「東京に入れば日本人になれ」という考え方で「東京オリンピックを演出したい」と語り、東洋、日本の伝統の美しさを活かし、五輪憲章で決められている開会式ではなく、閉会式の演出で工夫を凝らす意向を述べている。伊藤道郎「期待裏切った開会式 欠けていた流動感 東京では“日本の美しさ”を」『朝日新聞』1960年８月27日、朝刊、10頁。以下の記事でも、閉会式の演出について同様の内容が確認できる。閉会式には勝者も敗者も一堂に会して「東京音頭」を踊ることで、各国選手団の交流を図ることを提案している。「閉会式に“東京音頭”日本調とり入れたい 式典演出 伊藤道郎氏」『読売新聞』1960年８月４日、夕刊、４頁。

9　早稲田大学演劇博物館所蔵の「千田是也コレクション」「伊藤道郎関連資料」は現在非公開資料であるが、当該資料が非公開になる2014年11月以前に筆者が直接調査した記録を参照した。

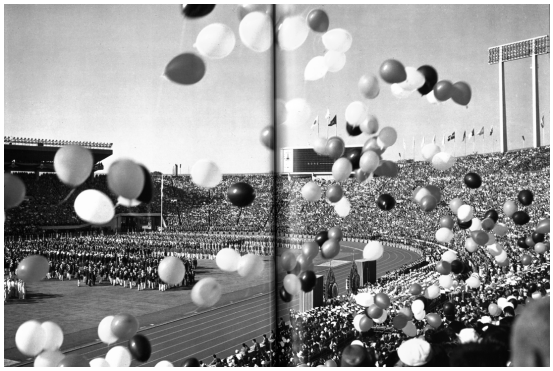
10　松沢一鶴は、第３回アジア競技大会において組織委員のうち、専門委員の競技委員会ならびに式典委員として明記されている。また式典委員には、作曲家の堀内敬三、諸井三郎、音楽評論家の山根銀二をはじめ、松沢一鶴委員長を含め総勢76名の委員が名を連ねている。その内訳は、日本体育協会、文部省、芸術家、評論家、化学者、建築、伝記などの技術家、防衛庁関係者、舞踊家、学識経験者によって構成された。これらの委員は次の７小委員会に分かれていた。（１）会場委員会、（２）音楽委員会、（３）旗委員会、（４）鳩委員会、（５）聖火委員会、（６）表彰委員会、（７）エクジビション委員会。田畑政治編『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、220-221頁、257頁。

11　前掲注10、296頁。

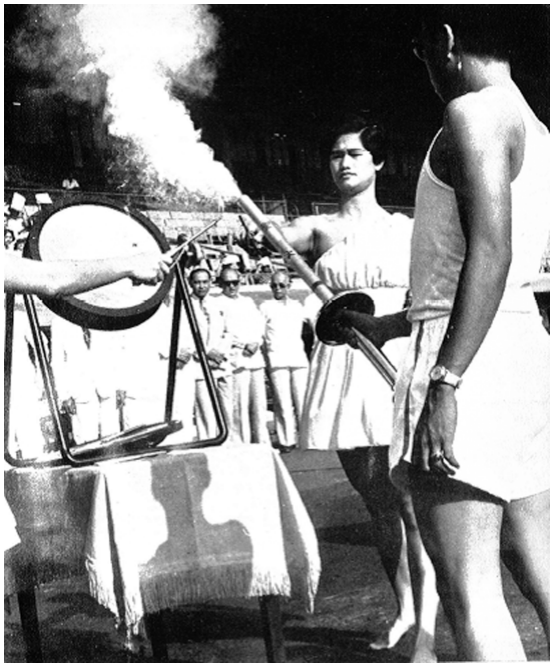
12　オリンピック東京大会組織委会会長の津島寿一は、1961年６月24日の『朝日新聞』紙面で1940年の「東京オリンピックが決まった当時から中央アジアの高原を横断するいわゆるシルクロードのコースは、個人が営営と営んだ長い歴史のロマンチックな香りとともに非常に興味が持たれている」として、「朝日新聞社でこのコースを踏破する計画が実現されたことは、組織委員会としても非常に意義あること」

であると言及している。「聖火リレー踏査隊 東へ　めざす炎熱サバク ジープで二万数千キロ／四氏からメッセージ 待ち望まれるデータ」『朝日新聞』1961年６月24日、夕刊、３頁。

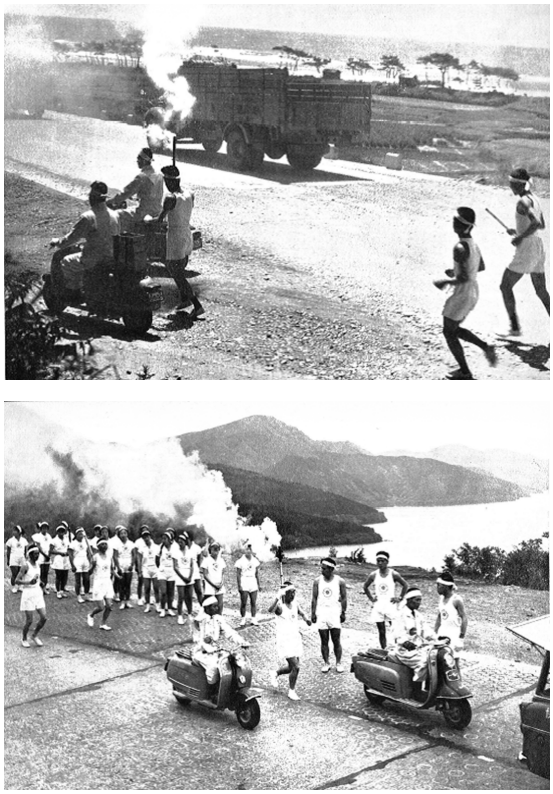
13　宮崎県の「熊襲踊（り）」は「バラ踊り」との名称を持ち、文化庁主導で実施した全国民俗芸能悉皆調査の一環として1994年に刊行された『宮崎県の民俗芸能―宮崎県民俗芸能緊急調査報告書―』（宮崎県教育委員会1994：94）には、北諸県郡山田町山内に伝わる「熊襲踊」は「山田バラ踊り（熊襲踊り）」として登録されている。大分県教育委員会・宮崎県教育委員会編『日本の民俗芸能調査報告書集成　九州地方の民俗芸能 大分・宮崎』３、海路書院、2007年、358頁。



【図版１】 第18回オリンピック競技大会 開会式（３発目の祝砲とともに１万個の風船が一斉にスタンド中断から上げられた）
オリンピック東京大会編集委員会『第十八回オリンピック競技大会公式報告書』上、オリンピック大会編集委員会、1966年、口絵写真

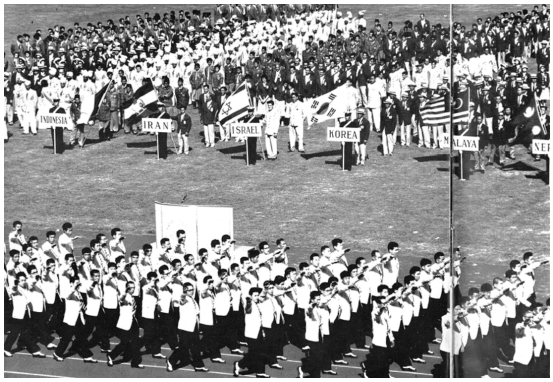


【図版２】 第２回アジア競技会大会開催地マニラのリハーサル競技場で点火される聖火（その後、自衛隊機にて日本に空輸）
『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真



【図版３】 東海道遠州灘を通過し（上）芦ノ湖畔を東京に向かう聖火（下）『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

【図版４】 聖火台に点火された瞬間『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真



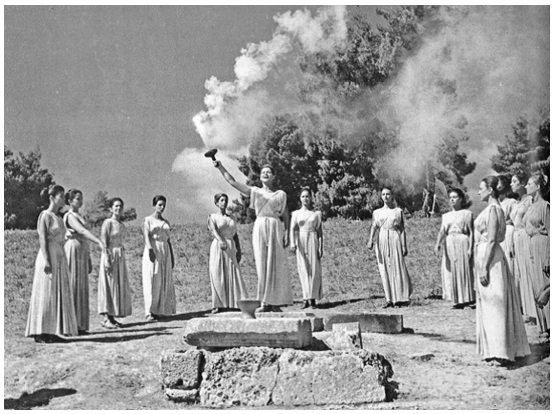
【図版５】 開会式　日本選手の入場行進『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

【図版６】 開会式エキシビジョン　体育ダンス『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

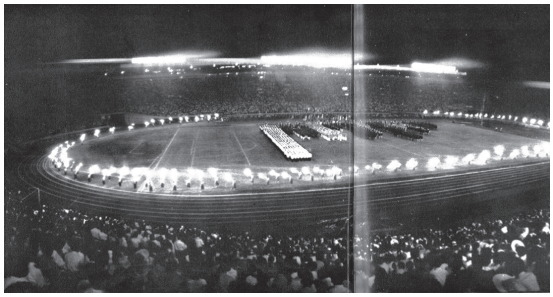
【図版７】 開会式エキシビジョン　日本民謡『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

【図版８】 開会式エキシビジョン　鼓笛バンドのパレード（都内小中高生）『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

【図版９】 ギリシャのヘラ神殿で太陽から採火された聖火　オリンピック東京大会編集委員会『第十八回オリンピック競技大会公式報告書』上、オリンピック大会編集委員会、1966年、口絵写真



【図版10】 トーチを空高く掲げるカッツェリ氏　オリンピック東京大会編集委員会『第十八回オリンピック競技大会公式報告書』上、オリンピック大会編集委員会、1966年、口絵写真



【図版11】 競技場の照明を落とし、選手が手に持つ松明が会場全体を照らす閉会式の様子『第３回アジア競技大会報告書』財団法人日本体育協会、1959年、口絵写真

四氏からメッセージ

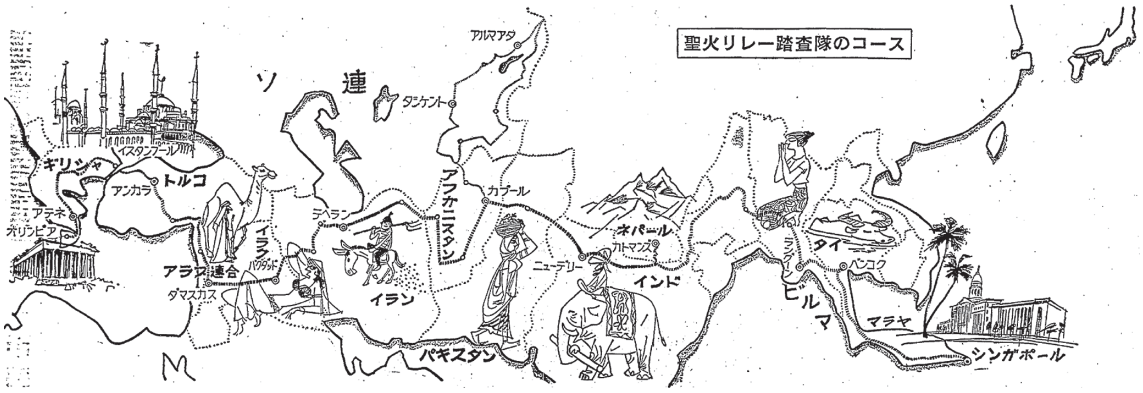
待ちのぞまれるデータ

オリンピック東京大会組織委員会会長 津島寿一

オリンピアを出発点として、ゆるぎかれる聖火リレーも、ひとたび、聖火リレーはオリンピックの象徴を、ひとつの大きな柱とも申せましょう。

戦前の一九四〇年に開催オリンピックが決まった当時から中央アジアの高原を横断するいわゆるシルクロードのコースは、古人が夢とロマンをかきたてられるものです。

【図版12】 聖火リレーのシルクロードコースは1940年開催の東京オリンピック当時から「四氏からメッセージ」『朝日新聞』1961年６月24日、夕刊、３頁



【図版13】 朝日新聞社が派遣する聖火リレー踏査隊コース「四氏からメッセージ」『朝日新聞』1961年６月24日、夕刊、３頁